

## 「シリーズ言語対照」の刊行に寄せて

近年の日本語研究において大きな進展を見せているのは、母語としての日本語(現代日本語)の構造の研究である。日本語母語話者が自然に獲得する言語にどのような構造が見出されるのかという問題意識が、現代言語学の発展や日本語教育の展開のもとで多くの研究者に共有されることとなった。日本の言語研究において現代日本語の構造の研究が重要な位置を占めるようになったのである。

それでは、現代日本語の構造の研究が言語研究としてさらなる発展を遂げるには何をなすべきであろうか。一つの有力な方途は、現代日本語の構造の研究で得られた知見を世界の諸言語と対照するというアプローチである。本シリーズではこれを「言語対照」と称する。言語対照のアプローチは、日本語の研究成果を相対化することを可能にし、言語の一般的性質の解明にも寄与することが期待される。言語研究における認知言語学や言語類型論の発展、また心理学における文化心理学の展開は言語対照を遂行するにふさわしい時代的環境を形作っている。

日本語と諸言語との対照はさらに、日本語の個別性と諸言語との共通性を明らみに出すことによって、日本語教育などの言語教育にも貢献できる道を開くことが期待される。本シリーズが言語に関する基礎的研究と応用的研究のあいだの健全な関係を維持するための一助となることを願っている。

本シリーズの特色として、次の三つを挙げることができる。第1は、論文集と個人研究書を二つの柱に立てていることである。論文集では特定のテーマについて日本語と諸言語を幅広く対照することを目指し、個人研究書では日本語と一つ(ないしは二つ)の言語を特定のテーマに関して詳しく対照することを目指す。

第2は、本シリーズ全11巻のテーマとして自動詞・他動詞、主題、テンス・アスペクトといったよく取り上げられるものだけでなく、音声文法、類別詞、属性叙述といった新たな課題をも掲げていることである。本シリーズでは、対象となるテーマの広がりにも重きを置いている。

第3は、言語対照の方法について様々な可能性を探っていることである。言語対照に唯一絶対の方法があるわけではない。考え得る多様な方法を試みるなかから優れた方法が発掘されるものと考えている。

本シリーズが今後の日本語研究と言語研究の発展に資することを切に願うものである。

シリーズ編者

中川正之・西光義弘・益岡隆志

## はしがき

人物や物体が移動するという出来事は頻繁に起こり、人の関心を引く事象である。そのため各言語には移動を表すための手段がある。その表現形式は言語によって異なり、時として複雑である。本巻ではこの移動という事象を諸言語がどのように表すかに焦点を当て、そこに見られる表現パターンの違いと共通性を明らかにしていきたい。

本巻では、まず、移動表現の類型論の一般的課題を明らかにした後、9の個別言語の移動表現の性質を検討する。扱う言語は、英語(松本)、ハンガリー語(江口)、ネワール語(松瀬)、中国語(ラマール)、タイ語(高橋)、ドム語(千田)、イタリア語(吉成)、シダーマ語(河内)、日本語(松本)である。さらに、特定の観点から日英独露語および日仏語の比較を行い(古賀、守田・石橋)、最後に、各章で得られた知見の総合的検討を行う(松本)。諸言語の多様性の中に隠れている共通の変異パターンを見出しながら、最後まで読み進めていただければ幸いである。

本巻で報告されている研究は、2000年代半ばからの神戸大学と東京大学を中心とした研究グループの活動が基礎となっている。執筆者のうち複数に関わった助成プロジェクトには、科学研究費補助金プロジェクト『言語類型論と日英語』(基盤研究B, 代表者松本曜, 2005-2008, 課題番号17320074)、東京大学21世紀COEプログラム『心とことば—進化認知科学的展開』、国立国語研究所共同研究プロジェクト『空間移動表現の類型論と日本語』(代表者松本曜 2010-2013)、科学研究費補助金プロジェクト『移動表現による言語類型』(基盤研究B, 代表者松本曜, 2015-, 課題番号15H03206)がある<sup>1</sup>。

2017年1月

松本 曜

<sup>1</sup> 本巻の編集にあたっては、江口清子氏、吉成祐子氏、伊藤彰規氏の協力を得た。ここに感謝の意を表します。

# 目次

## CONTENTS

「シリーズ言語対照」の刊行に寄せて .....	i
はしがき .....	iii
第1章 移動表現の類型に関する課題 .....	松本 曜 1
第2章 英語における移動事象表現のタイプと経路表現 .....	松本 曜 25
第3章 ハンガリー語の移動表現 .....	江口 清子 39
第4章 ネワール語の移動表現 .....	松瀬 育子 65
第5章 中国語の移動表現 .....	Christine LAMARRE 95
第6章 タイ語の移動表現 .....	高橋 清子 129
第7章 ドム語の移動表現 .....	千田 俊太郎 159
第8章 イタリア語の移動表現 .....	吉成 祐子 189
第9章 シダーマ語の空間移動の経路の表現 .....	河内 一博 213
第10章 日本語における移動事象表現のタイプと経路表現 .....	松本 曜 247

第 11 章 日本語とフランス語の移動表現	
—話し言葉と書き言葉のテキストからの考察—	
..... 守田 貴弘・石橋 美由紀	275
第 12 章 日英独露語の自律移動表現	
—対訳コーパスを用いた比較研究—	
..... 古賀 裕章	303
第 13 章 移動表現の性質とその類型性	..... 松本 曜
	337
文献	..... 355
索引	..... 367
執筆者一覧	..... 373

## 移動表現の類型に関する課題

松本 曜

### 1. はじめに

移動事象の言語表現について言語間に興味深い差異があることは、しばしば指摘されてきたことである。たとえば、ゲルマン諸語とロマンス諸語との間に大きな対立があることはかねてから知られてきた(Bergh 1948, Vinay & Darbelnet 1958, Malblanc 1968, Wandruszka 1971)。日本では宮島(1984)が諸言語の聖書の翻訳の比較に基づいて言語間における移動表現の差異を考察している。このような差異は1980年代以降、タルミーの研究によって意味的類型論の一つの例として大きな注目を浴びるようになった。タルミーは広範囲に及ぶ言語の比較に基づいて、移動表現の類型論を提案した(Talmy 1985, 1991, 2000)。その後、その類型論は多くの形で発展を見せており、様々な改訂や新たな課題が出されている(Slobin 1996, 2004, Matsumoto 2003 [2011], Croft et al. 2010 など)。

そのような研究の流れの中で、本巻は13の言語における移動表現の性質を統一的な枠組みの中で検討するものである。その中で従来の研究とは異なるいくつかの新しい試みを行う。具体的には「移動表現」を広く捉えること、またダイクシス(経路の直示的特性)の表現に注目することである。さらに、いくつかの言語においてコーパスや実験データを用いた研究を報告する。

本巻で移動表現と呼ぶものには三種類のものがあり、以下の三つの文で代表される。

- (1) a. *John walked into the house.*
- b. *Susan threw the ball into the room.*
- c. *Bill looked into the hole.*

(1a)は主語のジョンの移動を表している。このように移動物が主語である移

## 第2章

# 英語における移動事象表現のタイプと経路表現

松本 曜

### 1. はじめに

英語の移動表現の性質については、Ikegami(1970), Talmy(1985, 1991), Jackendoff(1990), Levin(1992), Goldberg(1995), Slobin(1996, 2000), 松本(1997), 上野・影山(2001), Rohde(2001), 米山(2009)など、多くの研究がなされてきた。このうち類型論的な研究の中では、英語が典型的な付随要素枠付け言語、あるいは経路主要部外表示型の言語であると主張されてきた。つまり、移動の経路を不変化詞や前置詞で表すということである。また、主動詞の位置には、主体移動であれば様態動詞、客体移動であれば使役手段動詞が置かれるのが普通とされてきた(Talmy 1991, 松本 1997, Slobin 2000 など参照)。

これまでの研究における問題点として三つのことが挙げられる。一つは、本巻全体で課題として取り上げているように、主体移動、客体移動、抽象的放射といった移動事象表現タイプごとの分析(さらには客体移動のタイプごとの分析)が行われてこなかったこと、また、ダイクシス(経路の直示的特性)の表現位置が考察されてこなかったことである。さらに、限られた特定のコーパスの分析は行われてきたが(Slobin 1996, 2000)、大規模なコーパスにおける数量的な分析が行われておらず、議論されてきたようなパターンがどれくらい一般的なパターンなのかがはっきりしなかったことである。

本章では、主体移動表現、客体移動表現、抽象的放射表現に共通して用いられる経路表現を概観した後、移動事象表現タイプごとに表現パターンを検討し、コーパスに基づく数量的分析を報告する。主に用いるのはコウビルドコーパスの中のusbooks(アメリカ書籍)のサブコーパスである<sup>1</sup>。このコーパ

<sup>1</sup> usbooks は 1990 年から 1998 年の間に刊行されたフィクションとノンフィクションの書籍からなり、約 7626 万語を含んでいる。

## 第3章

# ハンガリー語の移動表現

江口 清子

### 1. はじめに

本章ではハンガリー語の移動表現について、特にその経路の表現方法に焦点を当てて考察を行う。類型論的に見て、ハンガリー語の移動表現における興味深い特徴は、主体移動表現、客体移動(=使役移動)表現、抽象的放射表現のいずれにおいても、ほぼ一貫して動詞以外の主要部外要素が移動経路を表現する、経路主要部外表示型言語としての性格が見られる点である。つまり、主体移動、客体移動、抽象的放射の三つの移動事象表現タイプには共通の経路表現要素が現れる。ただし、経路概念のうち直示的経路概念には異なる点があり、主要部外要素である副詞および動詞接頭辞で表されるだけでなく、主体移動表現、および随伴運搬型の客体移動の表現に限っては、主要部である動詞においても表される。また、経路を表現する主要部外要素は複数あるが、そのうち動詞接頭辞がもっとも重要な役割を果たし、移動表現において動詞接頭辞に課される役割が大きい点も特筆すべきであろう。

本章の構成は以下のとおりである。第1節では本章の議論に関わるハンガリー語の文法的特徴および類型論的特徴を概説し、第2節では主体移動表現、客体移動表現、抽象的放射表現に共通した経路表現についてまとめる。第3節では主体移動表現、第4節では客体移動表現、第5節では抽象的放射表現についてそれぞれの詳細を記述し、考察を行った上で、最後に第6節で、ハンガリー語の経路概念表出に関する二つの問題について論じる。

---

本章に使用した例文の文法性判断を前大阪大学講師 Barta László さんにご協力いただいた。ここに謝意を表したい。ただし、本章に残る問題点はすべて著者に帰するものである。



## 第4章

# ネワール語の移動表現

松瀬 育子

### 1. はじめに

ネパールのカトマンズ盆地一帯で話されるネワール語の移動表現について、特筆すべき点が二つ挙げられる。一つは、直示動詞が多い点である。〈行く・来る〉を表す *wane/waye* のペアだけでなく、〈行かせる・来させる〉に相当する客体移動(=使役移動)の直示動詞 *chwaye/haye* があり、さらに〈持っていく〉に当る随伴運搬の使役移動動詞 *yā.ke* もある<sup>1</sup>。これらの直示動詞は本動詞としてだけでなく、動詞連鎖の主要部としても頻繁に使われるので、ネワール語は直示性に関しては主要部表示型と見られる。他方、直示性以外の経路概念に関しては主要部外表示型である<sup>2</sup>。

二つ目の特徴は、経路概念〈中外・上下・前後〉を表す副詞形に三つのタイプがある点である。主体移動の直示動詞のみに使われる副詞形、客体移動だけに使われる副詞形、さらには、主体移動と客体移動の両方に共通して使われる副詞形がある。同じ経路概念を表すのに、主体移動と客体移動を区別する複数の副詞形があることは、世界の言語で他に類を見ない特徴と言える。

今回のデータ収集では、プルナ・ラトナ・サキヤ氏に大変お世話になった。また、後半ではマニック・サキヤ氏、カピール・サキヤ氏にもご協力いただいた。ここに心よりの謝意を記したい。述べるまでもなく、本章での不備は全て筆者の責任である。

<sup>1</sup> 移動表現において、直示動詞が重要な要素であることはネワール語にのみ特有というものではなく、Wolfendon(1929)、DeLancey(1980)では、広くチベット=ビルマ諸語に共通する現象であることが述べられている。しかし、語彙的に独立した使役的直示の移動動詞が3種類あり、移動表現で頻繁に使われる点はネワール語の特徴として挙げるができる。なお、〈持ってくる〉を表す場合は *haye* 〈来させる〉が使われる。

<sup>2</sup> 経路主要部表示型—経路主要部外表示型という移動表現の類型と事象表現タイプの分類は、松本(本巻第1章)に従っている。

## 第5章

# 中国語の移動表現

Christine LAMARRE

### 1. 全体像

#### 1.1 言語の特徴

本章で扱う「中国語」は北京を中心とした北方中国のことばに基づく共通語である。中国語は、語形変化の少ない「孤立語」に分類される声調言語であり、基本語順がSVOである点においてタイ語と似ている。語順は情報構造に左右され、トピックを文頭に、フォーカスを文末に置く傾向がある。しかし中国語はタイ語と違って、形容詞句と関係節が修飾する名詞の前に置かれる点で、一貫性のないVO言語である。動詞句に関して、連用修飾成分(副詞・前置詞句)は結果述語として働く場合を除いて動詞の前に置かれる。この複雑な語順のあり方は移動表現における場所名詞・経路句の文法／統語的位置(動詞の前か後)に直接影響を及ぼすので、移動表現のタイポロジーにおける中国語の位置づけを考える際に、避けて通れない問題である。

本章では、中国語の経路を表す表現の全体像を紹介した上で、主体移動、客体移動、抽象的放射の表現について考察する。さらに、経路句・移動の参照点を表す場所名詞句が動詞の前と後という二つの位置に現れる要因について論じる。

なお、本章では文中の中国語の語・形態素を日本語と区別するために、前者を“ ”で、後者を「 」で示すことにする。中国語の簡体字が意味の理解の妨げになる場合、(=)を用いて対応する日本語の字体を示すことがある。例文のグロスに用いる略語の説明及び引用例の出典の詳細は末尾のリストを参照されたい。

## 第6章

# タイ語の移動表現

高橋 清子

### 1. タイ語移動表現の全体像

#### 1.1 タイ語の特徴

タイ語を含むタイ諸語の系統帰属はまだはっきりわかっていないが、シナ・チベット語族に属するとする説とオーストロネシア語族に近いとする説がある (Benedict 1942, 三谷 1989)。タイ語は、音韻論の面からは声調という特徴的な音素を持つ声調言語に分類され、形態論の面からは語形が変化しない孤立語に分類される。統語論の面からは基本語順が「主語、動詞、目的語」、「被修飾語、修飾語」となる言語、あるいは複数の動詞(句)が接続詞を介さずに連続することを許す動詞(句)連続言語に分類される。談話分析の面からは主語や目的語などの統語上の概念よりも主題などの情報構造上の概念のほうが優位に働いて文章が構成されていく主題卓越言語に分類される。

特に注目すべき特徴は、第1に、性、数、法、時制(定動詞)などの文法範疇のパラダイムが成立しておらず、文法範疇概念の特定化が必須ではないこと (Bisang 1995, 2001, Diller 1993)、第2に、動詞と名詞句の結び付きはかなり自由で、必須項はなく、動詞の項(主語、目的語)と非項(付加詞など)を明確に区別することができないこと (峰岸 1988, 2002)、第3に、内容語と機能語が連続体をなし、両者を厳密に区別することが難しいこと (Intratrat 1996, Prasithrathsint 2010)である。

タイ語移動表現の主要構成素は動詞であり、最低一つの移動動詞を使えば単純な移動事象を表現し得るが、異種あるいは同種の動詞を複数使って一つの節—動詞(句)連続体—を作り、複雑だがまとまりのある一つの移動事象として表現することが多い。一つの節に動詞が複数共起した場合、意味的な種類によって並び順が決まっているが、以上に挙げたタイ語の性質により、

## 第7章

# ドム語の移動表現

千田 俊太郎

### 1. はじめに

ドム語はパプア・ニューギニアのシンブー州、グミネ地区とシネシネ地区にわたるドムと呼ばれる一部地域に住む人々の使用することばである。話者は16000ほどと推測される(Tida 2006b)。本章はドム語の移動表現を取り上げその特徴について論じる。本節ではドム語の特徴、特に述語の構造を紹介し、移動表現について概観する。つぎに経路を表す諸形式、主体移動表現、客体移動表現、抽象的放射表現について節を分けて記述し、ドム語の移動表現に見られる特徴がドム語の動詞語根の少なさと関連することを論じる。

ドム語は五つの母音音素 /i, e, a, o, u/, 十三の子音音素 /p, b, m, t, d, n, k, g, s, l, r, w, y/ をもつ。長短の対立は語末の /a/ vs. /a:/ のみにある。/b, d, g/ と /p, t, k/ で音素表記する閉鎖音は前鼻音化有声音 [mb, nd, ŋg] と非前鼻音化無声音 [p, t, k] の対立をなす。多音節語の語末で /e/ は自由に脱落する。子音一つからなる語は単独で発音されるとき /i/ が語末に付加される。許されない子音連続には非音素的な [i] が挿入される。語を領域とするメロディーが語彙的に指定され、高(ˆ)、下降(˘)、上昇(˘)の三種類が対立する。

ドム語は主要部後置型言語である。動詞は節の最終要素であり、自動詞文は常にSV、他動詞文はAOVが好まれる。所有者など名詞類が名詞類を修飾するときは主要部に先行する。しかし形容詞類は主要部に後続する。後置詞には共同(˘*bol* <と>)、道具(˘*pal* <で>)を表すものなどがあるが、多くの名詞句(主語、目的語、場所、時間)は後置詞なしに文に導入される。ドム語は基本的に主要部標示型の言語(head-marking language)であり、主動詞には主語の人称・数が標示され、分離不可能名詞には所有者の人称・数が標示される。他の文法的特徴として動詞連続、節連鎖、後続節の主語同一性標示

## 第8章

# イタリア語の移動表現

吉成 祐子

### 1. はじめに

イタリア語は、スペイン語・フランス語・ポルトガル語・ルーマニア語などに代表されるロマンス語系に属し、動詞枠付け言語のひとつとみなされてきた(Talmy 1985, 1991, 2000)。動詞枠付け言語とは、移動の方向や経路位置関係が動詞に包入され、移動の様態は付随要素によって表されるものである。これが正しければ、イタリア語は松本(本巻第1章)の分類で言う経路主要部表示型言語になるはずである。たしかにイタリア語は主体移動の表現において移動の経路要素を主要部である動詞で表す特徴を持つが、同じ動詞枠付け言語である日本語よりも様態動詞の数が多く(Wienold & Schwarze 2002)、英語などのゲルマン系言語のように主要部以外の要素によって経路を表すことも多い。さらに客体移動や抽象的放射の表現においては、主要部以外で経路概念を表すことが基本パターンとなっている。つまり、イタリア語は純粋な経路主要部表示型言語ではないといえる。本章では、イタリア語の移動関連事象を検証することにより、混合型といえるイタリア語の移動表現の特徴を明らかにする。

#### 1.1 言語の特徴

イタリア語は基本的にSVO言語であり、前置詞言語である(ただし、主語人称代名詞が省略されたり、補語人称代名詞が動詞の前に置かれることがある)。ここでは、本章の課題に関わるイタリア語の特徴をいくつかあげておく。本章の中で注意すべきものに冠詞前置詞がある。前置詞である *a* 'at/to', *da* 'from', *di* 'of', *in* 'in/into', *su* 'on' の五つが、それに続く定冠詞と融合して一つの語となる。例えば、〈テーブルに〉という意味を表すイタ

## 第9章

# シダーマ語の空間移動の経路の表現

河内 一博

### 1. はじめに

本章は、エチオピア中南部で話されているクシ語族の言語の1つであるシダーマ語(Sidaama, Sidamo)において、3種類の移動事象の表現(主体移動表現, 客体移動表現, 視覚的放射表現)の一構成要素の経路がどのように表されるかを記述する。それと同時に、経路が主動詞によって表される可能性が、主体移動表現よりも客体移動表現の方が低く、客体移動表現よりも視覚的放射表現の方がさらに低いという、松本(2001, 2003, 本巻第1章)の仮説がこの言語にも当てはまるかどうかを調べる<sup>1</sup>。シダーマ語で経路が主動詞によって表される可能性は、主体移動表現と客体移動表現では極めて高く、それらの間に違いはほとんど見られないが、松本が問題にしている視覚的放射表現ではその可能性は全くない。

本章で使う枠組みは、Talmy(1985, 1991, 2000)のイベント統合の類型論である。この類型論によると、どの言語でも1つの節で表すことができるマクロイベント(macro-event)というものがあり、マクロイベントは主要なイベントである枠付けイベント(framing event)とそれを支える共イベント(co-event)(例: 様態, 原因)から成っている。さらに枠付けイベントの最も略率的な要素(例: 空間移動の場合, 経路)を表すのが主動詞か付随要素(satellite)

<sup>1</sup> 私のシダーマ語のコンサルタントである Dr. Abeyayehu Aemero Tekleselassie, Mr. Legesse Gudura, Mr. Iyasu Gudura, Mr. Hailu Gudura, Mr. Yehualaeshet Aschenaki に感謝を申し上げます。本研究は、ニューヨーク州立大学バッファロー校、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、国立国語研究所、科学研究費補助金基盤研究(C)「Sidaama 語の文法の記述、及び意味論と形態統語論の理論的問題に関する研究」(研究課題番号: 21520431)(研究代表者: 河内一博)、同基盤研究(C)「東アフリカの言語の空間移動表現の研究」(研究課題番号: 24520490)(研究代表者: 河内一博)によって支援を受けた。

## 第10章

# 日本語における移動事象表現のタイプと経路の表現

松本 曜

### 1. はじめに

日本語の移動表現については、宮島(1984)、松本(1997)、影山・由本(1997)、鷺見(2000)、Sugiyama(2005)、上野(2007)など多くの研究がなされてきた。このうち類型論的な研究においては、日本語が典型的な経路主要部表示型の言語(動詞粹付け言語)であるとされてきた。しかしながら、これまでの研究にはいくつかの限界があった。一つは、本巻全体で課題として取り上げているような主体移動、客体移動(=使役移動)といった移動事象表現タイプごとの分析、さらには客体移動の下位タイプごとの分析が、限定的にしか行われてこなかったことである。特に、本章で視覚的放射と呼ぶ移動事象表現タイプに関しては、松本(2002)以外には取り上げた研究がない。また、日本語の移動表現の中で重要な役割を果たしているダイクシスに関しても十分な考察がなされていなかった。さらに、移動の諸要素の表現頻度や表現位置について数量的な分析も行われてはきたが(Koga et al. 2008, 秋田・松本・小原 2010, Ishibashi 2012 など)、いずれも特定の文献コーパスや特定の実験課題などの限られたデータに基づいたものであった。

本論では移動事象表現タイプごとに日本語の移動表現を検討し、さらに大規模コーパスに基づく数量的分析を報告する。用いたのは「現代日本語書き言葉均衡コーパス・モニター公開版(2009年度)」である。本論ではまず、主体移動、客体移動、抽象的放射の三つの移動事象表現タイプに共通して用いられる日本語の経路表現形式について整理したのち、各移動事象表現タイプで用いられる動詞について考察しながら、コーパスにおける表現パターンを検討する。そして、経路の直示的・非直示的特性の表現位置が、移動事象表現タイプによって異なることを指摘する(なお以下では、経路の直示的特

## 第 11 章

# 日本語とフランス語の移動表現 —話し言葉と書き言葉のテキストからの考察—

守田 貴弘・石橋 美由紀

### 1. はじめに

Talmy (1991, 2000) が提唱する移動表現の類型論において、日本語とロマンス系言語の一つであるフランス語は動詞枠付け言語—以下本章では松本 (本巻第 1 章) に従い「経路主要部表示型言語」と呼ぶ—に位置づけられている。本章では、日本語とフランス語の話し言葉と書き言葉のデータを用いて主体移動表現と客体移動表現を分析することで、言語の使用実態という観点から Talmy の類型論の妥当性を検証することを目標とする。

本章の構成は以下の通りである。まず本節に続く第 2 節ではフランス語の移動表現とその表現手段について先行研究を概観する。対照研究を目的としているため日本語の移動表現についても述べる必要があるが、日本語に関しては松本 (1997, 本巻第 10 章) を参照されたい。第 3 節では、話し言葉・書き言葉のデータから作成したコーパスの調査に基づいて、(1) 日本語およびフランス語における主体移動表現と客体移動表現が類型論的に同じ表現パターンをとるかどうかが、(2) それぞれのコーパスにおいて、好まれる表現パターンの中に一貫性が確認されるかどうかという 2 点を考察していく。第 4 節では、以上の結果を踏まえて、経路主要部表示型言語内での類型を再検討し、残された問題についても言及する。

---

本章は「言語対照研究ワークショップ『移動表現の類型論と類型の一貫性』」(神戸大学, 2007年8月1日・2日)での口頭発表を加筆・訂正したものである。発表ときに貴重なコメントを下された方々および話し言葉のデータ収集にご協力くださった神戸大学及びリヨン第2大学の学生の皆さんに御礼申し上げます。



## 第12章

# 日英独露語の自律移動表現 —対訳コーパスを用いた比較研究—

古賀 裕章

### 1. はじめに

Talmy(1991, 2000)は、移動事象における経路情報がどの形態統語要素によって表されるかという基準に基づき、世界の言語を2つのタイプに大別した。経路が主動詞によって表される言語は「動詞枠付け言語」(verb-framed language)と呼ばれ、フランス語やスペイン語に代表されるロマンス諸語や日本語はこのタイプに属するとされる。一方、経路が動詞接辞、不変化詞に代表される、動詞に付随する要素で表示される言語は「付随要素枠付け言語」(satellite-framed language)と呼ばれ、英語、ドイツ語などのゲルマン諸語やロシア語を含むスラヴ諸語は一般的にこのタイプに分類される。以下、本章では、松本(本巻第1章)に従い、前者のタイプを「経路主要部表示型言語」、後者のタイプを「経路主要部外表示型言語」と呼ぶ。

本章の目的は、対訳コーパス調査に基づき、実際の言語使用の観点から日本語、英語、ドイツ語、ロシア語の自律移動表現を比較、対照することである<sup>1</sup>。翻訳において、ソース言語に現れる移動事象はターゲット言語の類型の特徴(経路主要部表示型 vs. 経路主要部外表示型)と言語個別の特徴

本章は、東京大学21世紀プログラム『空間移動と言語表現の類型的研究2』所収の Expressions of spatial motion events in English, German, and Russian: With special reference to Japanese に大幅に加筆、修正を加えたものである。ドイツ語のデータコーディングにご協力いただいた青木葉子氏、水野真紀子氏、ロシア語のデータコーディングにご協力いただいたユリア・コロスコア氏、そして、論文執筆にあたり貴重なご意見をいただいたクリスティーン・ラマル氏、松本曜氏に深く感謝の意を表したい。本章に残るいかなる誤り、不備も筆者の責任である。

<sup>1</sup> 本章では、使役移動(Talmy(2000)の agentive motion)と抽象的放射以外の移動事象、つまり移動物(figure)が自らの意志で移動する self-agentive motion と、意志を持たない無生物が移動物であり統語的主語である non-agentive motion を併せて、便宜上「自律移動」とする。

# 第13章

## 移動表現の性質とその類型性

松本 曜

### 1. はじめに

本章では、本巻で記述考察されてきた内容から、諸言語における移動表現の性質とその類型性に関してどのような一般化ができるかを考察する。以下、主体移動表現、客体移動表現、視覚的放射表現についてまとめた上で、総合的な類型についての考察を行うことにする。

### 2. 主体移動表現

まず、主体移動表現におけるダイクシスと経路の表現について考察しよう。

#### 2.1 ダイクシスの独立性

本巻で注目している点の一つは、ダイクシスの独立性である。第1章ですでに、ジャミンジュング語、ガーグジュ語などの例を挙げて、ダイクシスが他の経路概念と異なる位置で表現されうることについて触れた。本巻で報告されている言語の記述からも、その考え方は支持される。たとえばネワール語とドム語では、ダイクシスが主動詞で表現され、それ以外の経路概念は主要部外要素で表現される(松瀬(本巻)、千田(本巻))。経路が表現されるのが主要部か主要部外要素か(あるいは動詞か動詞付随要素か)という対立で言語の類型を考えるなら、この二つの言語はダイクシスと他の経路概念で異なる類型に属することになる。このような言語の存在は、類型の考察においてダイクシスを経路から独立させて論じる必要性を物語っている。ハンガリー語でも両者の違いが見られ、主動詞でダイクシスを表すことができるが、この位置で他の経路概念を表すことは稀である(江口(本巻))。

このほか、ダイクシスが他の経路概念と異なる特定の位置で指定される言